

# レコードを集める

## —コンプリートとヴァリエーションの追求

帯広畜産大学人間科学研究部門 教授

渡邊芳之 (わたなべ よしゆき)

### Profile — 渡邊芳之

1990年、東京都立大学人文科学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学。信州大学人文学部助手、北海道医療大学看護福祉学部講師、帯広畜産大学畜産学部助教授を経て、2005年より現職。専門はパーソナリティ心理学、心理学史。著書は『性格とはなんだったのか』（新曜社）、『図解 心理学のことが面白いほどわかる本』（共著、中経出版）、『あなたはなぜ変わらないのか』（共著、ちくま文庫）、『心理学・入門』（共著、有斐閣）、『心理学方法論』（編著、朝倉書店）など。



### なにを集めているのか

私が集めているのは19世紀末から1990年代にかけて世界中で大量に生産されたレコード、いまのCDの祖先、樹脂製の黒い円盤に音楽の溝が刻まれたものである（写真1）。円盤を一定の速度で回転させながらその溝をダイヤモンドなどの針で擦り、針の振動を力学的あるいは電気的に増幅することで音楽が再生される。レコードではCDと違って表と裏の両方に音楽が入っていて、片面を聴き終わるとひっくり返して裏面を聴くというのもレコードで音楽を聴く時の特徴的なしぐさだった。またレコードは紙で作られたジャケットに収められており、そこに印刷された絵や写真、ライナーノーツ（レコードの解説）などを眺めることも楽しみのひとつである。

私が初めて自分のお金でレコードを買ったの

は1973年頃であるから、それから40年間ほとんど休むことなくレコードを買い続けたことになる。最近はお出張などの際に東京の中古レコード店で買うだけでなく、通販やオークションを利用して世界中からレコードを買い集めている。その際に英語の読み書きができることは自分の専門的な訓練が趣味に役立っているといえる。

現在自宅の地下室にはLPレコード（塩化ビニール製で毎分33回転）がおよそ3000枚、シングル盤（塩ビの7インチ径で45回転）とちょっと古いSP盤（シェラック製で78回転）がそれぞれ300枚程度収蔵されている。地下室にはそうしたレコードと、それを再生するための旧式なオーディオ装置が置かれていて（写真2）、そこで過ごすのが日々の最大の慰めになっている。最近では大学の仕事の傍らにレコードやオーディオについて文章を書いて、それがス



写真1 さまざまな時代のさまざまなレコード



写真2 1976年製のガラード401、下にあるのは古いレコード用のイコライザ

界の書籍や専門誌に掲載されたりもしている。

ネット音楽以前の時代には、音楽を自分のものとして所蔵するためにはレコードやCDを買う以外の方法がなかった。自分の聴きたい曲、聴きたい歌手や演奏家のレコードを買っているうちに知らず知らず枚数が増えていくということはレコードでもCDでも同じだろう。しかし、ただ聴きたいものを聴きたいだけ買って枚数が増えていくだけでは、「コレクション」とか「蒐集」とは呼ばれにくいと思う。それはまだ健全な音楽愛好家の健全な営みである。

レコードを買う集めることが「蒐集」という魔境に入るためには二つの要素があると思う。ひとつは「コンプリートの追求」、もうひとつが「ヴァリエーションの追求」である。いずれも単に聴きたい音楽のレコードを聴きたい時に買うのではなく、レコードという「もの」自体についてなんらかの目的意識をもって買い集めることにつながる。

### コンプリートとヴァリエーション

レコードを買い集めて音楽を聴いていると、好きな歌手や演奏家のレコードを残らずぜんぶ揃えたい、という気持ちが生じてくる。私の世代だと「好きなアイドルのレコードをぜんぶ揃えたい」（写真3）「ビートルズのレコードをぜんぶ揃えたい」といったことがそうした「コンプリートの追求」のスタートラインだっただろう。ビートルズだとイギリスオリジナルアルバムが12枚、これに何種類かの編集アルバムと数枚のシングル盤を買うことで、彼らが公式に発表した楽曲はぜんぶ揃えることができる。こ



写真3 大場久美子のシングル盤コンプリート

れでひとまずコンプリートということになる。

ところが、ビートルズのアルバムがひとつおろし揃う頃になると、レコード店の店頭で自分がこれまで揃えてきた国内現行盤（その当時に日本国内でふつうに製造販売されていたレコード）とは少し違うレコードがあることに気づく。同じ国内盤でも製造時期の古いものはジャケットや収められている曲が違っていたりする。また、日本以外に彼らの本拠地であるイギリスや、アメリカ、ドイツ、フランスなど各国で製造されたレコードもあって、これもまた国内盤とはいろいろな面で違いがある。

同じ内容のレコードでもレーベル（レコードの中心に貼られたラベル）の色やマークは製造国ごと、製造時期ごとでさまざまに異なるし、ジャケットに印刷された文字や印刷の風合い、レコードそのものが入っている内袋のデザインなど、ヴァリエーションは無数にある。それに気づいてしまい、いろいろ集めたいなあと思ってしまうたらもう後戻りはできない。

レコードには面倒なことがもうひとつあって、たとえば同じビートルズの同じ「ラバー・ソウル」のアルバムであっても製造された国や、同じ製造国でも製造時期によって音質がかなり違う。おしなべてその音楽が録音された国で、録音の直後に製造販売されたレコードの音質が最も優れており、それが「オリジナル盤」として珍重され、高値で取引されている。ビートルズのオリジナル・イギリス盤で状態の極めてよいものだと最近では1枚5万円を超える。日本国内で作られたものでも、発売直後の1960年代のものと70年代、80年代に製造されたものとは音質が大なり小なり異なる。ここにもヴァリエーションの魔境がある。

### 病膏育に入る

コンプリートの追求にヴァリエーションの追求が加わると、まったく同じ音楽の入ったレコードを何枚も買い集めて、それを比較検討して楽しむということが趣味の中心になってくる。こうなると所蔵レコードはどんどん増えていくようになる。私はいま「ラバー・ソウル」のレ

コードを7枚持っているし(写真4)、ビーチ・ボーイズの「ペット・サウンズ」も7枚持っている(もちろんそれに加えてCDも持っているわけだがここではそれにはふれない)。「そんなに持ってどうするのか」というのが普通の人の感覚だろう。入っている音楽はどのレコードで聴こうがCDで聴こうが同じようにすばらしく感動的なものだから。



写真4 これらはぜんぶ同じレコード

クラシック音楽のレコードでコンプリートとヴァリエーションを追求しようとするのもっと大変なことになる。ひとりの人気指揮者や演奏家が生涯に録音するレコードの数というのは、ビートルズやビーチ・ボーイズよりずっと多い。またクラシックでは発売から10年くらいを経ると、同じ録音が廉価盤として番号やジャケットを変更して再発売されることも多くなる。

たとえばエルネスト・アンセルメがスイスロマンダ管弦楽団を指揮したベートーヴェンの交響曲第5番のレコードは、私の持っているだけでもイギリス盤4種類とアメリカ盤、これにドイツ盤や南アフリカ盤、日本盤を加えると8種類あって、他に存在は把握しているが持っていないものもまだ数枚ある(写真5)。もちろん入っている音楽・演奏はまったく同じものである。そしてアンセルメはベートーヴェンやブラームスの交響曲をすべて録音しているし、他にも評価の高いフランス音楽など無数の録音があって、それぞれに同程度のヴァリエーションが存在するのだ。まず一生かかっても集めきることはできないだろう。



写真5 これらもぜんぶ同じ演奏

収蔵するレコードが1000枚を超えるあたりからは、普通の音楽愛好家のレコード棚のような演奏家別、歌手別で年代順、あるいは作曲家別といった整理のしかたよりも、レコード会社別、カタログ番号順に並べて整理していくほうが合理的になる。しかし、番号順に並べ始めるとこんどは欠番を埋めたくなくなる。たとえば英デッカ社の棚のLXT5152の隣にLXT5154が並んでいると、LXT5153も手に入れてその間に収めたい。このときすでにLXT5153に何の曲が誰の演奏で入っているかはどうでもよく、ただ番号さえLXT5153で棚の隙間を埋めてくれればいいのである。私のレコード棚にはそういう理由だけで買い集めたレコードがおそらく100枚以上は収蔵されている。病膏肓に入るとしか言いようがない。

### なぜ集めるのか

レコードを集めるような人はたいがい他にも蒐集の趣味を持っているもので、私も10年くらい前まではレコードと並行して古いカメラを集めていて、大きな棚に数十台のカメラを並べていた。これにしても、写真を撮るといふ本来の目的でいえばカメラなど2~3台持っていれば十分なのであって、写真よりもカメラという「道具」を集めることが目的になっていた。そして、オリンパスのコンパクトカメラをぜんぶ集める、同じカメラでも製造時期によって違いがあるのを揃えるというように「コンプリート」と「ヴァリエーション」はやはり蒐集の主要な動機だった。

カメラと同様、レコードに関しても、もう自分はレコードに入っている音楽よりもレコードというメディアそのものが好きで集めているのだと思わざるをえない。こういう「コンテンツよりもメディアに興味をもつ」という志向は、私の研究にも反映されている。私の業績のほとんどは心理学としての研究成果を挙げるものではなくて、そうした心理学のコンテンツを生み出すための枠組みや方法といった心理学のメディアを対象にしたものだ。心理学史的なことに興味をもってきたのも自分の「蒐集癖」と基盤をとともにしていると思う。人はそうそう違ったことはできないのである。

そうした蒐集全体を動機づけているのは「自分が集めないと消滅してしまう」という危機感である。お金や貴金属、定評ある美術品などと違い、古いレコードはそれに興味をもたない人にとっては何の価値もない単なるガラクタであって、簡単に捨てられ燃やされてこの世から消滅してしまう。私を買ってきて棚に収めておけば、それは当分のあいだは消滅を免れることができる。

自分が死んだ後のことは考えないのがコレクターの鉄則だが、それでも私は自分が集めたレコードが自分の死後に放置されたり捨てられたりしないで市場に出て同好の士の手へ渡ることを切望しており、家族にもそのように頼んでは

いる。一般に、きちんと分類され目録に整理されたコレクションはそうでないコレクションよりも引き取り手が多く、売値も高くなる。私がコツコツとレコードの目録を作っているのはまったく同じものを複数買う失敗をしないためだが、自分の死後のためでもある。

### 理想の同好の士

そうはいいながら、私は自分の地下室にこれまで「同好の士」はひとりも入れたことがないし、コレクターの団体やサークルなどにも属さず、レコード店の店先などでコレクター同士が交わしている会話などにもいっさい加わることがない。そういう意味では、私は具体的な誰かに見せたり自慢したりするためにレコードを集めているのではないし、自分の蒐集について他人の評価はとくに気にしていない。

しかしそういう自分も「世界のどこかにいる理想の同好の士」を思い浮かべ、その人にコレクションを自慢したいというような気持ちはあるのだと思う。だからこそ自分の Web ページでコレクションを披露したりするのだろうし、それを見た国内外の蒐集家から問い合わせがあったり、資料が送られてきたりするの楽しいものである。しかし私の「理想の同好の士」はあくまでも目の前にはおらず、言葉を発さないからこそ理想なのだろうと思う。



写真6 地下室のレコード棚